

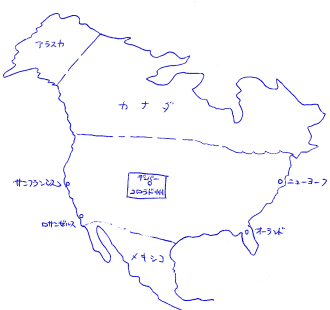
はじめに 4

面白い出来事

1	粉雪を吹き飛ばす咳	1
2	ペップボーイのアベ君	1
3	稲荷弁当	1
4	なんとなくオロギ	2
5	雪の上をあるくアリたち	2
6	フランケンシュタイン	3
7	デンバーサミット	3

ツーリングの思い出

1	アメリカ北西部に向かう渡り鳥ツーリング	4
2	第54回スタージスHDラリー	5
3	第55周年を迎えるスタージスへのお参り	7
4	モアブへのツーリング	8
5	あるスワップミートへのツーリング	9
6	クアーズビル工場へワイドグラスを夢見て	10
7	大陸横断貨物列車の輝き	11
8	ある夜間走行の思い出	15



地図 216

アメリカ文化を考える

1	開拓者魂と国民性	1
2	愛してるわ	2
3	白バイ隊員の本音	3
4	ずぼらは発明の母である	4
5	インディアンの警察官とパトトラ	6

日本人とアメリカ

1	営業マンのEさん	1
2	ところで貴方は何才？	6
3	小池君	8
4	日本村と村長たち	7
5	日本人の集団心理	8

ふと思う

1	出会い	1
2	トムと木馬	9
3	ギフト	0
4	パワー	5

あとがき	2
	1
	3



はじめに

たまたま日本の戦後の復興期の一九五〇年代に、たまたま日本は静岡県浜松市に、たまたま男として生まれた私は、これまた、たまたま子どもの頃からオートバイが好きであった。人生にはこの「たまたま」が毎日のように現れては消えてゆく。それは川の流れに似ている。しかし、いつも残されているのは自分であって、これは他人事では済まされない、興味深いものがあるのである。

二十年以上も、このたまたま興味をひかれたオートバイと付き合わせて戴くことによって、様々な人と出会い、時には「よくもまあ」という経験もさせて戴いた。このお付き合いは私にとっては、天から戴いたギフトだと思っている。

この本を作成するにあたり、YIEL電子出版部の山内昭・多佳子御夫妻にまずお礼を申し上げたい。そして息子の直哉、友之と元氣、パートナーの規子さん、大学時代からのオートバイ仲間の杉江利彦氏、オートバイを通じて友好を持たせて戴いている加古洋二郎（元国際A級レーサー）氏、ユニコーンユニオンの関西支部長の山



本純氏をはじめ、メンバーの皆さん、ハーレー・デビッドソン・イーグルズ・クラブ関西支部の野口喜和氏はじめメンバーの皆さん、ヤマハ650ソサエティーのジム・ガードナー氏とメンバーの皆さん、ニューメキシコ州アルバカーキーのボブ・ラング氏、ドイツに帰ってしまったラルフ・ガーベ氏、浜松でお世話になった阿部孝夫（元国際A級レーサー）氏、コロラドのBBCのロン・アボ氏、ハリー・スー氏、ビニー・マグニフィコ氏、トム・レントン氏、ボブ・カゴハラ各氏はじめ、多くのオートバイ仲間たちにお礼をしなければいけない。

オートバイの経験談だけではなく、日本からきた外国人としてアメリカに住み、十六年間の生活の中で感じたこと、考えてみたことなどを、いろいろな角度から主観に主導権を委ねながらも分析したものも、紹介させて戴こうと今日に至る。面白可笑しく読んで戴ければ幸いである。

またCD ROMにての出版ということで、書面の本では不可能な、解像度の高い写真イメージをつけることが可能になっているので、私の撮ったいろいろな写真をも楽しんで頂けるものと信じている。アメリカ中西部の魅力も味わって戴きたい。

ひとつの形となつて、皆さんの脳細胞に多少なりともダメージを与えられれば、これにこしたことはないと思つ。



デンバーのダウンタウンのランドマーク。D&F タワー（コロラド州）